

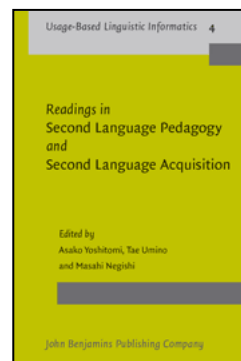
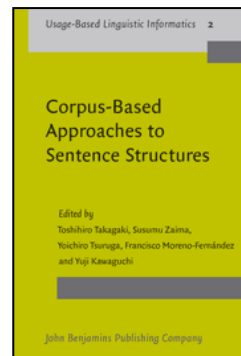
研究プロジェクト概要

1. 研究目的

<研究の学術的背景>

コンピュータ技術とインターネットの急速なダウンサイジングによって、1980年以降、様々な言語で本格的な書き言葉を中心とする大規模な言語コーパスが構築され始めた。この流れを受けて言語研究においても言語コーパスを利用したコーパス言語学が隆盛となった。その結果、従来の作例および小規模な事例を中心とした言語研究には見られない新たな言語事実と知見が次々に明らかとなった。今日では世界各地でコーパス言語学の国際会議やワークショップが開催されている。また一方で、従来の誤用分析に代わって、とくに英語においては蓄積された学習者の言語データを利用し、コーパス研究の理論と成果を言語教育に応用すべく、1990年代から学習者言語コーパスの研究が始まった。

東京外国語大学大学院地域文化研究科では、2002年に筆者をリーダーとする21世紀COE「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」が採択された。この拠点の目的は、コンピュータ技術を利用して言語学と言語教育学の有機的な統合を図り、言語情報学という研究領域を創成することであった。21世紀COE拠点事業の中で、とくにコーパス言語学と学習者言語コーパスの研究は採択当初から継続的に行われ、かなりの研究成果をあげてきた。なかでも多言語にわたる多数の言語研究者を擁する東京外国語大学では、様々な言語を対象としたコーパス言語学の研究を行い、その成果を公刊した(T. Takagaki et alii, *Corpus-Based Approaches to Sentence Structures*, 2005, John Benjamins 右上の図を参照)。また、2003年12月と2005年12月に2度の国際会議を開催し、多数の海外研究者を招聘し、彼らとの議論を通して、言語学と言語教育学を有機的に統合することの意義が明確になっただけでなく、研究成果がオランダのJohn Benjamins社からUsage-Based Linguistic Informaticsのシリーズで出版されるようになり、国際的レベルの研究拠点として国内外の研究機関から高い評価を受けた。2005年12月と2006年9月には2度の国際ワークショップを開催し、話し言葉コーパスの学術的意義とその言語分析の重要性、さらには学習者言語コーパスについて議論した(A. Yoshitomi et alii, *Readings in Second Language Pedagogy and Second Language Acquisition*, 2006, John Benjamins 右下の図を参照)。さらに教員の指導のもとに院生を現地に派遣し、海外の高等研究機関の研究者と協力関係を構築しつつ、フランス語、スペイン語、イタリア語、トルコ語、ロシア語、マレーシア語等の話し言葉コーパスを構築し、その成果を世界に向けて発信した(多言語コーパス 言語機能別コーパス参照)。本研究計画の学術的背景は、筆者がリーダーを務めた21世紀COEの国際会議とワークショップにおけるコーパス言語学と学習者言語コーパスの最先端の研究成果に基づくものである。



<研究の目的と目標>

本研究では、多言語による話し言葉コーパスと学習者言語コーパスという2つの言語コーパスの構築とその分析を研究プロジェクトの中心に据える。以下に本研究の目的と目標を詳述する。

① 話し言葉コーパスの構築と言語運用研究

[1] 海外高等研究機関との連携による話し言葉コーパスの構築

2004年度から2006年度にかけて、21世紀COEが中心となって話し言葉コーパスの構築を行ってきたが、コーパスの規模は十分とは言い難い。そもそも言語コーパスの構築は半永続的に続けられるべき作業である。本プロジェクトでは21世紀COEによって確立された海外の高等研究機関との協力関係(エックス・マルセイユ大学、マドリッド自治大学(スペイン語)、マルマラ大学(トルコ語)、淡江大学(中国語))を継続すると同時に、さらに協力関係を他の国々へも発展させながら、大学院生によるフィールド録音を行い、話しことばコーパスを拡充する。またラオ語、クメール語(カンボジア語)については、書き言葉に基づく言語コーパスを構築する。

[2] 話し言葉に基づく言語運用研究

英語や若干の例外的な言語を除いて、ほとんどの言語の文法研究は規範文法の記述とその解説に終始し、実際の言語運用に基づいた文法記述は十分に行われているとは言い難い。このことは「話し言葉」がしばしば「不規則で、逸脱した、俗な」言語と見做されてきたことに原因があると言える。英語やフランス語においても、話し言葉の研究は1980年以降に本格化したに過ぎない。英語でさえ最近になってようやく英文法の中に、「書き言葉」と「話し言葉」に見られる重要な文法現象の相違などが記載されるようになった(たとえば Douglas Biber et alii, *Longman Student Grammar of Spoken and Written English*, 2002 を参照)。その意味で、話し言葉における言語運用の記述と研究は、いまだ基礎研究の段階であるとともに、現代言語学の重要な任務の一つと言える。

② 学習者言語コーパスの構築と学習者言語の分析

[1] ネットワークを利用した学習者言語データの収集

本学で独自に開発した教材を学習者がネットワーク上で利用し、ディクテーションや作文や録音を行うことができるインターフェースを提供する。同時に学習者はこのシステムを用いて自分の言語データをサーバー上に蓄積し、目標言語に関する言語能力の履歴を管理できるようにする。研究協力者はこの言語データベースを学習者言語コーパスとして利用するだけでなく、従来のインタビュー方式による発音の参与観察法なども用いて、言語分析と第二言語習得研究を行う。本研究では、英語、フランス語、日本語について、学習者言語コーパスを収集する。

[2] 観点別の学習者言語分析

従来の学習者言語分析は、答案やタスクの分析、あるいは質問票を用いた小規模な研究が中心であり、体系的な言語分析というよりは項目分析が一般的であった。本研究ではネットワークを利用し、半自動的に学習者の目標言語に関する知識をデータベース化することで、より広範で言語運用の実情に近い学習者言語コーパスを構築することができるものと考えられる。さらに収集された学習者言語データは、学習者の習得プロセスに応じて分析することが可能になる。また基本的な言語機能を実現するための表現形式や、特定の状況や文脈における談話や、特定の文法形式や音声等が実現できるかどうかを *Can-do statements* 化し、これらの達成を学習者言語コーパスの中において分析することで、従来よりも具体的な観点に基づいて学習者の言語能力を体系的に分析することができるようになるかもしれない。

[3] 言語コーパス研究成果の言語教育への応用

本研究では話しことばコーパスと学習者言語コーパスを用いて言語分析および第二言語習得研究を行ない、最終的にその成果を言語教育の中に応用できないかどうか検討する。

先にも述べたが、本システムを利用して日本語およびフランス語を学ぶ学習者は、自分の学習履歴にアクセスすることができる。それによって習得の発展段階を確認でき、その習得プロセスを意識しながら学習を行うことが可能になる。他方、話し言葉における言語運用を分析し、特定の言語現象を網羅的に調べ、その分析を学習者言語コーパスと定量的・定性的に比較することで両者の違いを明確にし、教育に応用できないかどうか検証する。

<学術的な特色・独創的な点及び予想される成果と意義>

① 言語運用分析の言語教育への応用

既に述べたように、書き言葉を中心とする言語コーパスの構築は近年とくに目覚ましいものがあり、話者のそれほど多くない言語に至るまでコーパスが構築され公開されていることが珍しくない。本研究では、構築される言語コーパスが実際の言語運用に立脚しているという点を重要視する。すなわち一方において、話し言葉および書き言葉コーパスの研究を通して言語運用と言語変異の分析を行なう。最終的には、その成果をコミュニケーションな言語教材の中に反映することを目標とし、学習者言語コーパスに見られる学習者言語の特性や誤用を分析し、どうすればより効果的な目標言語の習得が可能になるのか、そのための教材開発を視野に入れる。

② 言語能力と学習者言語能力に関する通言語的な視点

話し言葉の分析や学習者言語の分析は、英語などの例外はあるものの、世界的にみても研究が始まったばかりである。とはいえヨーロッパでは、本研究においても海外協力機関となっているエクス・マルセイユ大学等を中心とするコンソーシアム *C-ORAL-ROM* により、ロマンス諸語の話し言葉の通言語的な研究が始まっている (E. Cresti et alii, *C-ORAL-ROM*, John Benjamins, 2005 参照)。しかし *C-ORAL-ROM* とても成果を教育に還元し、話し言葉の分析結果を学習者言語コーパスの分析結果と対照させるという視点はなく、さらにそうした分析をロマンス諸語以外の、ヨーロッパとアジアの諸言語で観察するという

観点は全くない。その意味でも本研究は極めて独創的な研究であると言うことができよう。